
星たちの街

みー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星たちの街

【Nコード】

N6908S

【作者名】

みー

【あらすじ】

星空が美しい街。星々は人々を癒やし、誰もが星を愛している。しかしそんな素敵な街にも生きるのに必死な人たちがいる。幼い頃に捨てられた女の子や、差別されていた少数民族の末裔である男子、経営危ぶまれるプラネタリウムの管理人……みんなが星を見上げながら、必死に生きている。

星たちの街の、プラネタリウム（前書き）

具体的な国や時代の設定はありません。名前は日本風のもありますが、舞台は日本でないつもりで書きました。

星たちの街の、プラネタリウム

この街の人はみな星を愛でる。

太陽が没して夜の闇が街全体を飲み込み、無数の星が夜空で瞬き始める。

すると人々は夜な夜な表へ出ては星々を見上げ、その美しさに言葉を失うのだ。

街自体、空を見上げるのに都合よく造られている。視界を遮る背の高い建物はなく、各々の家には決まってゆつくりと空を眺めるためのテラスがある。中心部にある小高い丘には街の役所がベンチを設置しており、そこに座ると特に見晴らしが良い。

みんなが特別な想いで星を見上げる。そのスケールの大きさを目の当たりにして、人間が小さく無力だと痛感させられた人も少なくともいであろう。また辛い時には、黙って寄り添い包んでくれる友人のように感じられるかもしれない。いずれにしても、心の中にはいつも輝く星々があり、みな想いを馳せる。そして美しい星空をこよなく愛するこの街共通の価値観を、誰もが心のどこかで誇らしく思っているのだ。

そんな街にプラネタリウムができたのはもう何年も前のことだった。

夜の空に広がる星空の美しさには到底及ばない。だがせわしなく気を抜くことが困難な日中、束の間の息抜きと癒やしの場として、そこは大いに賑わった。息抜きだけでなく、親子連れが楽しげに訪

れたり、恋人同士が肩を寄せ合ったりする場だった。夜にしか見えない星を昼にも提供することで、街の人々と星との繋がりを一層強いものとした。

ナミキは役所から派遣されたプラネタリウムの管理人であつた。日中賑わうプラネタリウムで何人かの従業員と共に働いていた。ナミキの仕事は主に映し出された星の解説であつたが、いかに観客を惹きつけるか試行錯誤するのは楽しく、やりがいを感じていた。夜になるとプラネタリウムに併設された管理人用の社宅で眠った。愛する妻がいて、去年は愛娘まで授かつた。娘が大きくなったら色々な所に家族旅行へ行こうと決めていた。眠る前には妻と旅行の計画をたくさん練つた。二人の間では小さな娘が寝息を立てていた。全部実現しようと妻と微笑みあつた時、自分は何て幸せなのだろうと思つた。

ある日ナミキは最後の上映時間が終わると、忘れ物がないか調べるために人気のない館内に入った。無人のプラネタリウムは静かで、非日常的だ。掃除行き届いているかも知見ながら、ゆっくりと館内を歩き回つた。

そしてナミキは後ろの方の座席に、毛布のようなものをみつけた。忘れ物だ。そう思つて近付き、違和感を感じた。毛布は少し膨らんでいた。そして、動いているように見えた。

毛布を剥がしてみると、ナミキはその下に見たものに息を呑んだ。赤ん坊が眠っていた。

捨て子であることはすぐに分かつた。赤ん坊はまだ小さくて、自分で歩くこともできない。プラネタリウムに赤ん坊を置き忘れる親などもいるわけがない。考えられる可能性はひとつ、誰かが故意に、置き去りにしたのだ。

念の為役所へ相談に行ったがやはり赤ん坊を探す届け出は出て

おらず、身元が分かるような物も残されていなかった。服に書かれた「ゆず」という名前が、この子に関する唯一の情報だった。しかしその名前の子供は登録すらされていなかった。結局役所にはいくつかの孤児院を紹介され、その資料を持ち帰った。

ナミキは強い憤りを感じていた。

拾った赤ん坊は、自分の子供と同じくらいの小ささだった。こんなに非力で、何の罪もない赤ん坊をなぜ置き去りにできるのか。到底信じられないし、理解もできない。

ゆずは自分の子供と並んで寝かせた。とても愛らしい赤ん坊で、天使のようだと思った。そうしている内に、孤児院へ連れて行くことに抵抗を感じた。この子を幸せにしてあげたい。この愛らしい赤ん坊二人を、自分の手で育てられないだろうか。

その夜、ナミキはその胸の内を妻に打ち明けた。

この子を孤児院へ行かせるより、うちで育てたい。収入も特別多いわけでもないし、三人の今ですら贅沢はできない生活だけど、僕はこの子をうちの家族に迎えて、うんと幸せにしてあげたいんだ。四人で生きていけたらと思うんだ。

すると奥さんは涙ぐんで言った。

それでこそあなたよ。あなたのそんな所が大好きなの。わたしもこの子を幸せにしてあげたいわ。

こうしてプラネタリウムの捨て子は、ナミキの家に拾われたのだった。

星たちの街の、プラネタリウム（後書き）

連載一話目終了です、お付き合いいただきありがとうございます！よかったら感想、評価お待ちしております。

プラネタリウムの家族

この国には昔三つの身分があった。

国の人口の97%を占めるは平民。彼らの髪は黒く、肌は褐色で背が小さい。

残りの3%を占めるはグレイと呼ばれる者たち。名の通りグレイの瞳と髪色。背は高く、独自の話し言葉と脅威の身体能力を持つ。

しかしその生まれ持った能力は妬みの対象になり、数の少なさというハンデのみで、平民たちから蔑まれていた。多くのグレイは辺境の小さな村や地下に逃れ、己らの能力を絶やさないため鍛錬の日々を送っていた。

そして最後に、1%にも満たないごく少数の身分ーライト。

雪のように白い肌、ゴールドとグレーの間のような光を放つ瞳と髪色。

「ライトは王族の末裔」

そんな噂がまことしやかに囁かれる程に美しい容姿。いつしか、神聖身分として敬意を表された。

実際彼等の血筋には天才が多く、医術や科学技術の進歩に大きく貢献した。

しかし三身分の時代は、半世紀前に終わりを告げた。

平民の言葉を覚えたグレイが地上や都市に現れ平民との混血が進み、差別は色濃く残れど、以前のように都市からグレイが追い出されることはなくなっていた。

それに追い打ちをかけるように政府が発表したのは「ライト絶滅」元々身を潜め、ひっそりと暮らすことを好んだライトであったが、政府によって確認されていた最後のライトである医者が死亡したことを受けて、正式な絶滅とされた。

この星たちの街では、平民、グレイ、その混血が共存している。

元来穏やかな性格の人が多いこの街だが、他の地域から越して来たり嫁いで来たものの中には、こんな陰口を叩くものもあるようだ。

「娘の同級生にグレイがいるのよ。どうしてクラスを分けないのか不思議だわ！危害を加えられたらどうするつもりなのかしら？」

「この街は、なんで食事場でグレイと分席されてないんだ？メシが不味くなる……」

だが、教育制度が整い始めた現在、グレイに対する嫌悪感は間違ったものであり、人々は身分という概念を捨て去るべきであるということが入念に教え込まれている。そのため子供たちは「差別」という概念を持たず、差別なき世代として成長している。

それはプラネタリウムで育った義姉妹も同じ……

「柚！行くよっ」

片手にメモを持った少女が妹を元気に手招きした。黒髪は肩の上で切り揃えられ、意思の強そうな猫目が輝いている。

ナミキの実娘、モモである。

「待ってー！」

そう言いながら一生懸命走ってくる妹。白い肌に大きな丸い瞳、色素の薄い背中までの長い髪。

プラネタリウムの捨て子、柚。ナミキに拾われた幼子であった。

「今日は出店の商品どんなのがあるかなあ？母さんが、このメモの他にも買っていていいって言ってた！あたしは北国産のフルーツが食べたいな！柚は？」

柚は答えをためらい少し俯いた。それを見て、モモは盛大にため息をつく。

「まさか、まあた旅のガイドブックがほしいとか言うんじゃないよねえ！？うちの家計のヤバさ知ってれば、食べ物以外に余計な買い物出来ないの知ってるでしょ。たとえどれだけ旅が好きでもさ！」

うん、分かつてる……と、柚は呟いた。

「まあ、二人でフルーツ半分こしよ！あの甘いやつ、好きでしょ？」
「すき！」

二人は微笑んで頷き合った。

夕方の出店の並びは買い出しに来た女の人たちで賑わっていた。色とりどりの食材が並べられた出店から、売り買いの音が飛び交い活気に満ち溢れている。

モモは柚の手を強く握ると、小さな体で上手く人混みをすり抜けて行く。

「おっちゃん！」

目当ての店を見つけると、モモは店主に声をかけた。

「おお、モモ！よく来たな！」

「この魚三匹ちょうだい！」

父であるナミキ、お母さんのアサ、モモと柚は二人で一匹なので、計三匹だ。

しかし店主は大きな手で魚を掴むと、四匹の魚を袋に入れて差し出した。

「おじちゃん、三匹だよ」

柚が焦ったように言うと、店主は八重歯ををむき出しにして笑った。
「わりいな、最近数え間違いが多くてね。もう戻すのもアレだし、持ってってくれよな」

そう言う店主は次の客の対応を始めた。柚が不安げにモモを見ると、モモはにっ、と笑った。

「やったね。おっちゃん、イケてる！」

買い物であらかた済ませ、残った金でフルーツを買いに行った。両手に大量の食材を持つ二人は、やつのことで人混みを抜けて行く。

すると、突然モモが足を止め、後に続いていた柚はその背中に危うくぶつかりかけた。

「モモ、どうしたの？……」

柚がモモの肩越しに前方を見ると、二人の同級生の母親たちが集まってお喋りをしていた。

モモの視線はその一人に注がれている。

柚もその人に気づき、すぐにモモの背中に隠れる。

それはトーコという同級生の母親であった。

裕福なトーコの父親の家に嫁ぎこの街に来たらしい。元住んでいたところは特別グレイへの反感が色濃く残っていたため、この街の共存状態に辟易しているとか。娘のトーコの同級生であるグレイを根拠もなく口悪く罵ったり、貧しい家を見下したりしている。

数年前から経営の悪化に苦しむプラネタリウムのことも、陰で「閉鎖秒読み」と吹聴していた。

その人がまた、グレイの話をしている。

「グレイの男の子と同じ教室だなんて、トーコがいつ暴力振るわれるか気が気じゃないわ！」

モモや柚は、トーコと同じクラスをである。

そして、そのクラスのグレイとは二人の大切な幼馴染、セナだった。セナの悪口を目の前で聞いて、二人はとても不快な気分させられていた。

「……帰ろ、柚」

モモが踵を返したその瞬間、こんな言葉が聞こえた。

「しかも最近トーコ、あの捨て子と仲良くなっちゃったのよ」

あの捨て子、というフレーズに柚の肩は跳ねる。モモは足を止め、その目の色を変えた。

「あら、ご存知なくて？柚ちゃんよ。あの子昔、プラネタリウムに置き去りにされていたのを引き取られたそうよ」

聞いていた母親たちは頷いたり、驚いて息を呑んだりしていた。

「ナミキさんも捨て子を拾うなんて物好きだと思わない？まあ、昔はプラネタリウムも繁盛してたから娘が二人いても育てられたかもしれないけど、今じゃあの状態でしょう？閉鎖秒読みのプラネタリ

ウム。ただでさえ質素な暮らし強いられるのに、おせっかいに捨て子まで拾ったから生活が大変よね」

さすがに反感を買ったのか、母親の一人が意見する。

「けど、柚ちゃんは出来のいい穏やかな子でしょう？みんな言ってるわ」

それを聞いてトーコの母親は顔をしかめる。

「あの子の目の色見たことないのね？」

「確かに髪も瞳も変わった色素の子だけど、平民の中にも真っ黒じや無い人はいるわよね？混血が進んでいるし……」

「日の当たる場所をよく見てみなさいよ、あの子……間違いなく、グレイよ」

母親たちは驚きのあまりざわついた。柚が涙目でモモを見ると、モモは歯を食い縛り、トーコの母親をもの凄いい形相で睨み付けていた。「ナミキさんが知らないはずはないわよね。グレイだと、知っていて拾ったのかしら？だとしたら変わってるわ、あの夫婦」
楽しそうにくつくつ笑いながら、こう続ける。

「あのプラネタリウムの経営難も、不吉なグレイを拾ったせいかしら？」

その時、モモが食材の袋を柚に押し付け、トーコの母親の方へかけで行った。

そしてついに、背後から両手で全力で突き飛ばしたのだ。

トーコの母親は突進に近い衝撃を受け、無様に地面に転がり呻いた。綺麗な装いも、身につけた高価なものたちもすべて、無様に見える。

「柚に謝れクソババア！」

モモが涙を流しながらそう叫んだ。

「柚はあたしの大切なたった一人の妹なんだっ！父さんと母さんが働きにでも、柚がいてくれるからあたしはさみしくないんだ！父さんだって柚を育てたこと誇りに思っつていつも言ってる！」

道の真ん中で涙を流しながら喚き散らす子どもに、地面にのびた女性。不審に思った人々が集まって来た。

「プラネタリウムだって、学校を出たらあたしがすぐこの手で蘇らせてみせるんだから！昔みたいなみんなのプラネタリウムを絶対取り戻すんだ！」

トーコの母親は体を起こしてモモを睨んだ。

「大人に対してその口の利き方は何？実の娘もともに教育できてないのね。」

「こんな時だけ「大人」ぶるな！さっきまでこそそこそ陰口叩いてた癖に、あれは大人のすること！？」

モモは振り返り柚の手を取ると、トーコの母親を一瞥して群衆の中に入って行った。

帰り道、モモは無言でトーコの手を引いていた。

「モモ、柚さっきのこと気にしてないよ」

柚は後ろから話しかけたがモモは返事をしなかった。

「お父さんがいつも、うちは世界一幸せな家族だって言ってるよね。誰に何言われも、それは変わらないんでしょう？」

モモが足を止めた。そして振り返る。

その目から大粒の涙が溢れていた。

「そんなの分かってる！けど、分からず屋のあいつが柚の悪口を言うのを、黙ってみてるのは我慢出来なかったよ！」

モモはその小さな手を柚の背中に回し、大きな声で泣いた。

「柚はあたしの自慢の可愛い妹なんだっ！誰にもけなされたくない、柚が傷つくところを見るのはやだ。柚には、うちに拾われてよかったと思って欲しいから！」

「思ってるよ……いつも思ってる」

いつしか普段涙を見せない柚の目からも、涙が頬を伝っていた。

その時彼女は心の中で誓ったのだ。

自分を拾い、これ程までに愛してくれるこの家族を、一生かけて幸せにしようと。

それが彼女の恩返しで、いつしか必ず叶えるべき夢となった。

グレイの兄弟

グレイは、異様に発達した身体能力で恐れられている。

だが中には受け継いだ高い身体能力を衰えさせないために、日々鍛錬を重ね続ける者たちがいた。

彼らの多くは平民に介入されない地下の修練場で鍛えており、幼い頃から並々ならぬ強さを手に入れる。

また、厳しい稽古の中で強靱な精神力が身につき、たいていの差別などは何とも感じなくなる者もいる。

「おおああ!!」

怒号にも近い叫び声を上げながら、男は刀をかざし、目にも留まらぬスピードで振り下ろした。

そのスピードたるや常人には出せないものである。

だが刀は虚しく空を切り、修練場の地面に突き刺さった。

それを避けたのは、まだ幼さの残る少年であった。

男は刀を地面から引き抜くと、次々に少年を狙って突きを繰りだす。しかしその突きは、すべて少年が身体を少し動かしただけで外れてしまう。

完全に見切られているのだ。

息が上がった男は、刀を構え直すために上体をおこした。

その一瞬に隙を見たのだろうか。少年は相手の腰に素早く近づき、その拳で男を殴った。

呻き声とともに男が倒れる。

修練場朝の稽古、手合わせを見ていた他のグレイたちから感嘆の声が漏れる。

「すげえ……あいつ一撃で……自分の刀も使わなかった」

「無駄に動いてないから息一つ上がったやいねえ。バケモンか？」

少年は首を回すと男を起こし、土埃を払ってやった。

そして奥で手合わせを見ていた大男の元へ行く。

「師匠、どう？」

短く刈られた髪に太い両腕。盛り上がった筋肉が、大男の威厳を増している。

「セナおめえ、いつまで相手の攻撃を見守ってるつもりだ。相手が攻撃をしかける間にも隙はあっただろうが」

セナと呼ばれた少年は、凶星をさされてぐつと顔をしかめた。

「決定的な隙を待ってちゃ遅いってこと、か」

「そうだ。いくら見切りが得意だって、避けてる間に確実に体力はなくなっていく」

「わかった。じゃあ時間だから行ってくるね」

セナはそう言うのと刀を預け、代わりに学生カバンを片手に修練場を出た。

グレイの中でも、武術・剣術共に遺憾なく才能を発揮するのが、このセナという少年だった。

持ち前の動体視力で攻撃を避け、相手は攻撃はおろか、ほとんどセナに触れることもできない。力も桁違いに強く、ほぼ一撃で倒すことが多い。修練場一派の中でも、師匠の次に強いグレイだ。

特有の、グレイの色をした瞳と髪。引き締まった身体に、細く切れ長の鋭い目をしている。まだ少年のせいかどこかあどけないが、心身共に日々鍛えられていた。

彼は親から離れ、普段は師匠の家で暮らしている。

セナがまだ歩くことをやつと覚えたくらい頃、住んでいた地域で差別派の平民による「グレイ狩り」が行われていた。

平民からの迫害を受け、子供の身まで守りきれないことを悟った彼の親は、知り合いである師匠の元にセナとその兄ハギを預けたのだ。しばらく修練場に身を隠していたが、地上に出た後消息がつかめな

くなつた。

どこかで生きているかもしれない。もう死んだかもしれない。いずれにしても、修練場の長である師匠に拾われたこともあり、兄弟は強くなろうと決めた。

首から下げたブローチは、親が残してくれたもの。ハギは父の、セナは母のを、それぞれ肌身離さず持っている。

兄弟は元々、ずば抜けた戦闘の才能に恵まれていた。両親を迫害したグループのような差別派への報復という野望に突き動かされ、二人はどんどん強くなっていった。

特に兄のハギに敵う者はなく、誰もがいずれ最強になると疑わなかった。

弟は兄を慕い、また目標にして、いつか二人で報復に行くことを胸に誓っていた。

だが、兄に突きつけられたのは離別であった。

街で一番星が綺麗に見える丘、二人がよく息抜きに来ていた場所に、セナは真夜中呼び出された。

ハギはベンチに横たわり、空の闇に広がったたくさんの光を眺めていた。

セナが来たことに気付いたのだろうか。顔を向けなかったが仰向けのまま、ハギはセナに言った。

「初めて来た時、この街の星空の美しさには驚いた……」

セナはベンチの脇に腰を下ろし、いつもと様子の違う兄に落ち着かずにはいた。

「俺は明日で16になる」

うん、とセナが頷く。するとハギは身体を起こして立ち上がり、セナに向き合った。

「16になれば政府の軍隊に入れる。この街を出て、そこにいくよ」セナは驚きに目を丸くして、急いで立ち上がった。

「何言ってるんだよ！？俺が卒業したら、二人で街を出るって約束し

たろー!!」

ハギの表情に影が差す。

「軍隊って何だよ！そんな政府から与えられた仕事やるモンだろ！俺たちの戦いたい相手と戦える保証なんてない。自由に動けなくなる。なのに……」

「自由に動けないのは下っ端だ」

「え……？」

「隊長になれば仕事を選べる。俺はすぐにそこまでのし上がってるさ」

「グレイには軍の役職すら与えられねんだろ？隊長だなんて……」
必死に反論するも、ハギの目は本気そのものであり、できないだなんて微塵も考えていないようだった。

そして不覚にもその瞬間、弟には軍の隊長になった兄の姿が鮮明に想像できたのである。

「じゃあな、セナ」

ハギはそう言うのと、弟に背中を向けた。

歩いていこうとするハギの背に、セナは叫ぶ。

「俺も!!」

ハギは振り返る。

「16になったら、そこへ行くからな」

セナは本気だった。小さい頃から、戦うなら兄と、そう決めていたからだ。

それは兄も同じだと思っていた。しかしハギは言った。

「お前はこなくていい。俺一人で……十分だ」

そうして、ハギは16になったその日に、本当にこの街を出ていってしまった。

プラネタリウムの子供の夢

翌日、モモと柚が市場へ買い出しにいくと、偶然セナに会った。

「よう、買い出しか」

「珍しいわね、あんたが来てるなんて」

「師匠の使い走りだよ。修練場の買い出しは、交代制なんだ」

セナはモモの後ろにいた柚に笑いかけた。

「柚も、元気か」

柚は微笑み頷いたが、モモは眉間にシワを寄せた。

「元気じゃないわよ！聞いてよ、この前ね……！」

「ああ、トーコの母さんにひどいこと言われたらしいな」

「知ってたの？」

「あんな往来でひと騒ぎすれば、街中に知れ渡るだろ。お前の口の悪さもな！」

セナはそういうと、にしつ、と笑ってモモを指差した。

「トーコの母さんのこと、クソババアって言ったらしいな」

モモは顔を赤らめた。勢いだったといえ、捨て台詞を吐いて突き飛ばしたのは事実である。

「やるじゃん。俺も、あのクソババアには散々けなされてんだ。すつきりしたよ。それより……」

ちら、と横目で柚を見て、セナがため息をついた。

「柚、グレイ呼ばわりされたらしいな」

そして、柚の顔を自分の方へぐつ、と近付ける。

「あいつの目は節穴かあ？瞳も髪も、俺の色と全然違うだろ」

「セ、セナ……ちかい」

「ちよつと、離れなさいよ！」

モモが引き剥がそうと手を延ばしたが、簡単にかわしてセナが距離を取る。

「もう！すばしっこいんだから」

「安心しな、柚！お前はどの間違っててもグレイじゃないよ！ホンモノの俺が保証する」

片手でピースサインをしてそう笑いかけると、セナは我に帰った。

「やべ、もうこんな時間かよ！早く帰らねえと師匠に怒られんだじゃー！」

そう言うのと、群衆の中へ駆けて行った。

夕方買い出しを終え家に帰ると、母のアサがちょうど仕事から帰ったところだった。

「おかーさん、おかえり！」

モモがその腰に抱きつく。柚もそれに続いて嬉しそうにかけて来た。「あらただいま！二人ともおつかい行ってくれたのね？毎日えらいわぁ」

アサは柚を抱き上げ、空いた手でモモの頭を撫でた。

「おかあさん、かわいくてお利口な娘が二人もいて、超助かる！」

アサが作った夕食を三人で食べ、その日に起こった話に盛り上がる。夕食を終えると社宅のテラスで星を見ながら父ナミキの帰りを待った。

「おとうさん、最近ごはんの時間に帰ってこないね……」

ナミキに心底懐いている柚が、心細気に呟く。

「最近、お役所のお仕事が増えたからね」

柚を撫でながら安心させるようにアサは微笑んだ。

「なんで？前はプラネタリウムのお仕事だけだったじゃん」

モモがそう尋ねた。

「プラネタリウムもね、前のようにお客さんがたくさん来てたら、お役所でお仕事しなくて済んだんだけどね……」

困ったような顔をするアサに、モモは意気込んで言った。

「大丈夫だよ！モモが学校を出たら、またおとうさんのプラネタリウム復活させるから！」

「あら、頼もしいわね」

「本当だよ、いろいろ考えてあるんだから！モモ、あのプラネタリウムだいすきだもん」

目を輝かせる娘を、アサは嬉しそうに見つめる。

「……柚は？何か、夢はないの？」

「柚は旅行が好きなんだよ。最近あんまり行けてないけど、小さい時はたくさん行ったじゃん？柚、言った場所の詳しい記録とか作るのすきだもんね。柚の書いてる旅の記録はすごいんだよ！見てるとわくわくしてまた行きたくなるの！きつと柚の夢は……」

「わたし、は……」

珍しくモモの言葉を遮り、柚は二人に真剣な目を向けた。

「おとうさんと、おかあさんと……モモを幸せにするの」
幼い頃から感じている感謝の気持ち。

捨て子であつた自分を拾い、決して余裕のない家計でも見捨てず育ててくれた……その上、惜しみなく愛してくれた。

その上姉のモモは、自分のために怒り、泣いてくれた。

この前の、トーコの母親に食ってかかったモモを見て、その決意はさらに固いものとなった。

「そう……」

喜んでくれると思っていたのに、柚の夢を聞いたアサは少し寂し気で、申し訳なさそうでもあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6908s/>

星たちの街

2011年5月29日20時15分発行